

Title	巴文について
Author	辻合, 喜代太郎
Citation	大阪市立大学家政学部紀要. 17 卷, p.117-120.
Issue Date	1970-02
ISSN	0473-4742
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学家政学部
Description	

Placed on: 大阪市立大学学術機関リポジトリ

Placed on: Osaka City University Repository

巴文について

辻合喜代太郎

On Tomoe Pattern (A Huge Comma Pattern)

By KIYOTARO TSUJIAI

巴文の起源について
 巴文の遺例
 我国の巴文について
 我国近世の巴文

我が国で古くから工芸意匠において家紋を初めとして広く用いられたのに巴文がある。巴文の構成は意匠としても種々な問題を提起している。この文様は万字文と極めて親近性をもったもので、万字文と同様に広く各地で用いられた主題の一つである。

この文様の起源に関しても種々の問題があげられている。これはこの文様の構成上から生じた本質的なものである。

雷文説

独国の Hirth はこの文様の発生について「凡そ日本の装飾工芸は多く、その範を中国に仰いでいる。それは恰も Rome の文化が Greek に基づいているように、日本の文化は中国にその源をもち、特に芸術においてはその感が強い。従って、中国古代の文字である雲と二重の同心円との結合した雷電文が周代の直線的な雷文繁となり、この繁の単位が曲線化して雷形式渦文となった」と述べている。

原始幾何学文

我が上代の土器類に施された装飾文としての多種の曲線文の旋回した結果に生じた曲線文の特種な形式に基因している。¹⁾

我国個有説

巴文は我が国個有の発展に基づいたという説で主に沼田頼輔氏の主張である。²⁾

以上の起源に関した諸説は何れもそれぞれの根拠を有しているが、更に一步前進してこの文様の構成について論及することが他面、この文様の発生を暗示するものである。

現在各地の民族間に用いられている巴文の構成を考えると、先ず Hirth は古代中国の象形文字から構成され

たものとし、自然現象に由来した動的な意義を象徴化したものと仮定している。Ranehester は巴文は自然物の形象に由来したものであることを指摘し、特に巻貝の Section から暗示されたものと仮定している。^{4) 6)} 他に Manron⁵⁾ は「太陽の Symbol とした八咫鳥の三足を象徴した Triskelion の形状にその起源を求め、三脚形に Symbolize された太陽神」と仮定している。この説は全く万字起源説から導かれた特種の考え方である⁷⁾

中国古代、古代朝鮮での遺例について次に検討すると先づ中国古代において周代の戈に施されたものを例として、これは金業 I に示されたもので最古のものとしている。漢代では広くこの文様を用いられたらしく、かの漢鏡の鈕座に見られ、石索所載の唐鏡にはその例が多くあげられている、主に易经に依拠した円の分割に基づいた方位を図示している。他面チベットの仏教においては八蓮花に仏の吉祥を象徴し、その中心に巴文を黒白によって象っている。特に原田淑人氏が指摘されているように唐代の遺例である新疆省ヤルキト近傍で Le coq が発掘した絵画にこの文様の描かれているものである。²⁾ この絵画は極めて薄い紙に彩色されたものであり、図中に騎馬像が描かれ、騎士は唐代の衣服を着用し、腰に佩いた鞆に二巴文が描かれている。この絵画の発掘された地は唐代の高昌国に属し、仏教、景教の盛況を極めた地方であるが、この文様は単に仏教的な文様としてよりも、寧ろ広く一般の人々に愛用されなものであったのだらうと推測されている。

古代朝鮮における最古の巴文の例は高句麗頃の恭愍王陵の石柱に見られた。(Fig 4) この二巴文の構成の意義は当時の易の思想に基づいたものであろう。元来、二巴文は天地陰陽説を象徴化したものとされている。

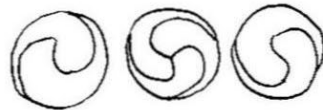


Fig 3



Fig 4



Fig 1

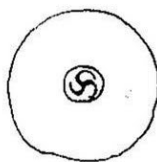


Fig 2

更に古い時代の遺物—南ロシア出土土器 (Fig 1.2), バスク民族に用いられた文様 (Fig 3)—に S 字形連続の入組部の単位によって表現された巴文がある。その他の夫々の地方において夫々の巴文の形式に種々の意味が附与されている。従って、その文様の構成については、各民族の特種の手法に則って考案された単純な渦巻文を円区内に巧妙に構成した追廻文であるとも考えられるべきである (Fig 11)。従って、巴文の発生はある地区に限定された一元的起源をもつものではなく、各民族の特異性に基づいて考案されたものであろうと考えられる。この点は万字文の発生と全く同様な経路を辿って来たものといえる。

我国における巴文特に古代に用いられた所謂原始巴文と藤原中頃から以後に全盛を示したものとについて述べる。我国上代において巴文は最も古く縄文土器 (Fig 5.6), 土偶に施された結縄文かその原始形である。これが発展して原始巴文を構成しているといわれる。(Fig 10) 然して、これには次のような形が考えられる。(Fig 7)

1. 二本の線が撚り合されたもの
2. 細線が数条巻き重ねられたもの
3. 所々に結束部を有したもの
4. 結束部を離れて曲線化したもの
5. 曲線的になったもの

以上の形式が認められ、この結縄文—追廻文—から導き出された原始巴文はその多くの場合、結縄文を構成している渦巻文の形式に由来している。その遺例は東北地方出土の厚手土器に施された一種の結縄突起部から発生した場合が多い。その構成は

1. 結縄文の一種である入組式の二つの縄文
2. 一つの線より屈曲して、内部に二巴の空間を発生したものと
3. 沈状式入組文によって発生したもの

以上の三方式が基本形となって、複雑な巴文を構成している。特に原始時代にはこの文様は渦巻文 (Spiral) が基本形となり (Fig 8), これが単位化されたものと、入組文、渦巻文の二つの線が結合したものと、その単純化が発生の契機をなしたものと考えられる。

(Fig. 9) において見るに

1. Spiral の並列
2. 隣りの Spiral との連続
3. 一線で各々に連続するもの
4. Spiral が両頭向いあって一つの unit となったもの
5. S 字形となる (4 よりの変化)



Fig 11

6. 三重線のもの
7. 5 と同一方法のもの
8. 7 の省略化されたもの
9. 入組式の Spiral
10. 11. 深く巻きこまれた Spiral
12. Spiral の巴文への移行

といった process が考えられる。

然し、他面、巴文が奈色期以降に至って広く愛用されたことは多くの遺例によって明白である。この場合、これらの巴文の祖形ともいふべきものは一体何か、即ち中



Fig 5



Fig 6

結繩文

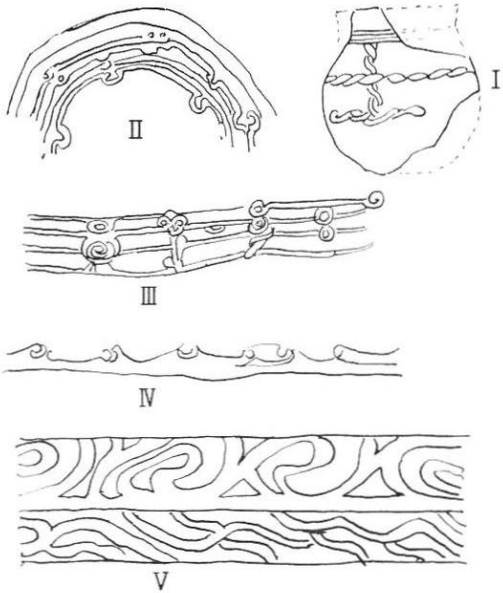


Fig 7

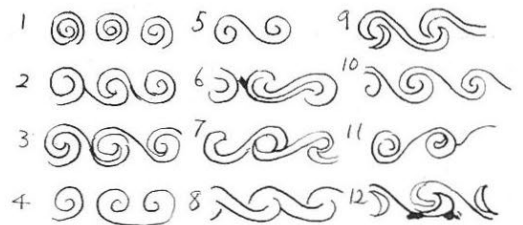


Fig 8

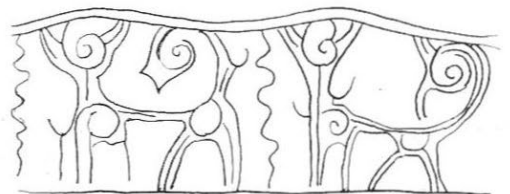


Fig 10

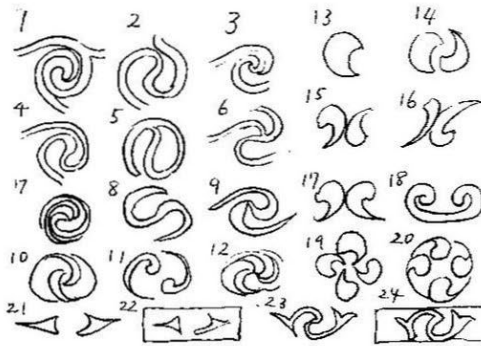


Fig 9

国文化の波及によって Hirth の説のように中国からもたされた巴文の形式であったか、又、前述のような我国上代に発生変化した原始巴文の形式にその祖型を求めるべきであろうか、

この問題は頗る難解なものである。我国上代の文化は確かに大陸文化の波及に基づいて発展したことは否定出来ない。然し反面、その文化の底流として我国固有の文化が有していたことも又否定出来ないだろう。巴文の場合において中国波及によった形式と、縄文文化に端を発した結縄文から導かれた原始巴文もその祖型として重要な意味をもっていたことは十分に認めなければならない。

藤原時代以後には巴文も種々の形を生み出し又、文様としても頗る洗練されて形式を案出している。その形式は単位が1, 2, 3個を配した形式である。二個の単位から構成されたものを「蛭螭巴」といい、特に丸味のもったのを「尾長巴」といって、最も主要な形式を形成している。この形式が藤原時代の代表的な巴文の形式であり、寺院装飾としての蓮華文の代用として珍重された。本来巴文は水に因んだということから火を忌むといった呪符的意味によっていたものであろう。

巴文が多く用いられるに従って、形と名称も複雑になってくる。頭部が右向のものを右巴、左向のものを左巴と称して区別している。これは王朝時代に儀式用とした太鼓に施された装飾文様としての巴文が、その太鼓の位置により、左側即ち左座のものに左巴を用いたといわれている。江戸時代にはその形式が更に洗練さを増し、種々の形式が創作されたのである。例へば、一頭巴、二頭巴、刈巴、違巴、巴木瓜、輪違巴、三頭巴、尾長巴、蛭螭巴、結巴、三金輪巴、巴菱、三盛巴、三積巴、九曜巴、ウロコ巴、四巴、五頭巴、カマシキ巴、巴梅鉢、字巴、草体寺巴、角字巴、三角字巴、釣巴、水巴、菊巴、富士巴、抜巴、子持巴、角巴、剣巴、雲頭左巴等々の形

式が見られる。しかも、巴文は武神として崇敬された八幡宮の神文となっていることから、武家の間では巴文を家紋として愛用される傾向が著しかった。

以上、巴文についての古代からの遺例をあげ、その種々の形式をも示した。特にその起源に関して我が国の巴文の祖型として縄文土器を飾った結縄文の展開に由って生じた原始巴文について考察を加へたものである。しかし、この問題については尚多くの疑問がこっていることは言うまでもない。今後、更に考察を加えるべき事実を提起したにすぎない。

文 献

- 1) 原田淑人著 考古学雑誌 vol 6. No.9
- 2) Le coq : Bideratas Zuur Kunst und Kulturgeschichts Mittels Asiens, Pl 70
- 3) 沼田頼輔著 日本紋章学 巴文項
- 4) Raucher : Secretes of f Earth and Sea.
- 5) Manron : Some origins and Sarvivals
- 6) Minno : Scythian and Greeks p. 138
- 7) Leberly : Springtime in the Basque Mountains part I . p. 77—78